



R.シュトラウス：

《メタモルフォーゼン》(レオポルト編／弦楽七重奏版)

この曲が完成した1945年4月、シュトラウスは81歳を目前にしていた。時は第二次世界大戦末期、ミュンヘンもドレスデンもウィーンの歌劇場さえも破壊され、翌月にはナチス・ドイツが降伏する時期である。「メタモルフォーゼン」は「変容」と訳されるが、これが「変奏」ではなく、より主題を自由に扱う音楽であることは、往時のシュトラウスの心境を表していると思われる。原曲は23の弦楽器のために書かれたが、今回演奏されるレオポルトによる七重奏版は、より凝縮された音楽となっている。

あおい

シュトラウスが1948年11月に書いた生涯最後の歌曲。この曲の献呈を受けたソプラノ歌手マリア・イエリツァが生前には公表しなかったため、1983年に発見されるまで埋もれていた。ベティ・クノーベルの詩に付曲したもので、夏の花園に咲くあおいの孤高を歌う。

憩え、わが魂

パウリーネとの結婚を記念して1894年に書かれ、彼女に献呈された《4つの歌》作品27の第1曲。挫折に傷ついた魂を鎮めようとするカール・ヘンケルの詩による。これには不首尾に終わったシュトラウスの最初の歌劇《グントラム》への傷心が反映されていると言われる。

《4つの最後の歌》

本曲は、シュトラウスの死の前年、1948年に書かれたソプラノとオーケストラのための作品。作曲者の死後に《4つの最後の歌》というタイトルが冠せられ、この順番にまとめられた。第3曲まではヘッセの詩によるが、第4曲のみアイヒェンドルフの詩に付曲されている。どの曲も、黄昏の予感を抱きつつも、透徹した美しさに包まれていて、その感情表現の振幅とスケールの大きさに心を打たれる。1950年の初演は、フラグスタートの独唱とフルトヴェングラー指揮フィルハーモニア管によって行なわれた。

歌劇《ばらの騎士》より「私が誓ったことは」

《ばらの騎士》第3幕終盤の有名な三重唱。元帥夫人にオクタヴィアンと新貴族ファニナルの娘ゾフィーが加わり、元帥夫人が恋路を譲る場面だが、元帥夫人のいかにも優雅で軽やかな身の引き際、また若い2人の陶醉に満ちた愛の音楽は、シュトラウスのオペラ作品のなかでも最も美しい瞬間の1つであろう。